

小国開放経済におけるマクロプルーデンスと金融政策

名古屋大学（特別研究員）高久 賢也
神戸大学 北野 重人

概要

本稿は小国開放経済における金融政策とマクロプルーデンス政策の関係を検討する。価格の硬直性とファイナンシャル・フリクシオンの両方が存在する小国開放経済の確率的動学一般均衡(DSGE)モデルを用いて、標準的なテイラー・タイプの利子率ルールと、それに加えて対外債務レベルについても同時に考慮するという利子率ルールの両ケースについて厚生と比較分析を行う。

分析の結果、対外借入のフリクションが比較的小さい場合は、テイラー・ルールに対外債務レベルを入れることは、厚生が悪化を招くことが明らかとなった。一方、対外借入時に生じるファイナンシャル・フリクションが比較的大きい場合には、対外債務の変動に対してより積極的に名目金利をコントロールすることで、厚生が改善する可能性があることが示された。また、この場合、政策当局によるマクロプルーデンス政策のスタンスが大きくなりすぎると、次第に厚生が悪化し、厚生の大きさを表す曲線が逆U字型になることも確認された。

こうしたファイナンシャル・フリクションの大きい新興市場国を考慮した本稿の分析結果は、小国開放経済における金融政策とマクロプルーデンス政策の関係を分析した先行研究の、価格の硬直性のみを考慮する方が望ましいという結論と対照的なものである。

キーワード：小国開放経済，金融政策，マクロプルーデンス，確率的動学一般均衡(DSGE)モデル，厚生分析